別子銅山を読む講座　13－2

「雨の銅山越」を読む

令和５年６月４日（日）10:00～11:30
元別子銅山文化遺産課長　坪井利一郎

1. はじめに

愛媛大学山岳会「愛媛の山と渓谷－東・南予編」の改訂版を西条市の古書店で見つける。「雨の銅山越」が収録されていたので目を通すが、記述か不正確なので購入をあきらめた。初版が昭和４９年なので、当時の大学生としてはこんなものかとも思った。別子銅山に関する情報量が少なかった時代に書かれた、６ページの古い記録を今風に読んでみる。

2. 注釈を施す

弟地の旅館森の屋に着く　日浦登山口から旧別子に登山するには、一般には、伊予三島経由でバスに揺られて別子山村に入るしかなかった。東平－日浦の駕籠電車を利用できる人は、第三通洞・日浦通洞を通り抜けて日浦に出られた。それも、昭和３９年の川又－東平の車道開通後と考えられる。

大野谷　南光院と日浦の中間で、北から下って銅山川に合流する。

日の浦　日浦の間違いである。日浦は太陽が山の陰になった日照量が乏しい地名である。「日の裏」は、農家の庭先を指す言葉である。「ウラ」は「ウレ」の語尾変化したもので、「先」を意味する。光の届く先で日当たりの場所となる。木の元に対する木の先である。

＜銅山の遺跡＞

銅山越の道を示す道標の立っている　日浦登山口。現在の駐車場は道路の直線化の残地を活用して造られたものである。以前の道路は北側にカーブしていた。古い写真を見ると、カーブした道と山肌の間にわずかな空き地があるので、ここにトタン小屋が立っていたと思われる。

立派な道　旧別子の幹線道路であったので、登山道の感覚からすると往還である。元禄時代に始まる道なので、元禄道とも呼ばれている。

谷を越したところ　小足谷橋を渡った小足谷集落。

赤煉瓦の塀・待館　接待館のレンガ塀。待館は校正ミスか。

高官を接待する館である。明治5年に建設され　明治３４年（1901）に、目出度町にあった住友新座敷に替わって小足谷の伊予屋支店（泉亭）を改装して接待館とした。要人の宿泊や来賓の接待、職員の親睦会に使われた。同年１０月には住友家１５代家長・住友友純が宿泊した。

川向こうには酒造場　旧説明板では、「川向こう」は「沢向こう」とあり、「酒造場」は「小足谷醸造場」とある。沢は、醸造所倉庫と藤田質店の間の沢である。愛大の記述では酒造

場は足谷川の対岸の収銅所の箇所になる。「酒造場」も旧説明板の「醸造場」の書き間違いである。

一万数千人　別子山村の全人口数なので、旧別子以外の人口を減じなければいけない。明治３８年の別子山村の人口は１１，１８６人。既存の村民は４００人から５００人と推計される。別子山村の人口は、松山市、今治市、宇和島市に続いて県下で４番目であった。

小学校に通う子供は三〇〇名を越し　明治３２年の生徒数は２９８名。先生は７名。

連夜二千人余りの観客　旧説明板では数千人。数千が二千人といわれだし、現在は千人以上と説明されている。旧別子、東平、四阪島の劇場を比較すると２０００人を超して収容できる。

旧別子	一階	350坪		※2000人を超して収容可
東平	二階あり	222坪	2042人	
四阪島	二階あり	187坪	1400人	

支谷との合流点にある造林小屋　対岸に病院、溶鉱炉、精錬炉、収銅工場などがあったと記述しているから、ダイヤモンド水の箇所。

高い崖の上から滝になって　直かに本谷に落ちているので、鉄管橋上流の第一通洞南口前を流れる付け替え水路からの落水である。滝となっている水は、沈殿池の水が溢れ出していると思ってっている。

急坂を登って台地　裏門からの右岸の急坂を登っている。台地は、見花谷と土持谷に挟まれたテラス状の勘場の箇所。

明治二十五年に焼失　明治１２年に勘場から改称された重任局は、明治２５年の火災で焼失して対岸の木方に移転した。跡地には縁起の端に鎮座していた大山積神社が遷座した。

乱塔場という…集団墓地　元禄７年の大火で亡くなった手代４人は、歓喜間歩のすぐ下に土葬されて石碑が建てられ、ここを蘭塔場と呼んだ。残る１２８人はそれぞれに葬られた。現在、蘭塔場と呼ばれている小山には、大火の少し後に亡くなった人の供養のために観音堂が建てられた。明治１１年に広瀬宰平が４人の石碑を観音堂跡に上げた。大正５年には瑞応寺におろして来ている。

　元禄７年で亡くなった１３２人の集合墓地ではない。現在、お盆には蘭塔法会がこの場所で行われている。

近道をして　土持谷を登り、蘭塔場の西裏を乗っ越し、風呂屋谷を渡り、岩場のおにぎりコースを登っている。雨天なので予定コースをショート・カットして近道をした。

広い道に出る　牛車道に出ている。

荒涼たる禿山　新居浜観光協会発行の「別子銅山」の旧別子銅山調査団一行が現地を訪れた昭和４６年１１月の写真では、縁起の端も地肌がむき出しになっている。旧別子を見渡すと周囲とは緑が隔絶している。５１年前に、銅山越から旧別子を見下ろすと、異様な景観に驚いた。大露頭の箇所の松もまばらに生えていて、人の丈の半分の高さである。

千枚岩に近い　逆層の緑色片岩が崩落して盛り上がっている当たりである。緑色片岩は、高

圧を受けて板状になっている堆積岩である。順層だと板状の間に隙間ができて、剥離して滑り落ちる。逆層だと板状にクラックが入って折れて崩落する。

風はますます強くなる　牛車道がおにぎりコースと合流した箇所から上は、西山へと風呂屋谷が続くので、旧別子から吹き上げてくる風道となっている。四国の南に高気圧があり、四国の北に前線が延びる状態になる４月から６月にかけて「やまじ風」が発生する。この時期には、銅山峰にも乱気流が発生して南からの強い風が起こる。そのため銅山峰の稜線では風成樹形が見られる。

峠が間近に　牛車道の最上部。

石地蔵　峰地蔵と呼ばれている銅山越えにある峠の地蔵。延享元年、大正５年と年代不明の３体の石仏が安置されている。峠は鎮魂歌を唄う所であり、遊離魂を鎮める所と考えて石仏を設置した。明治３９年ごろの別子銅山略地図の銅山越の標高１２９１ｍは１２９４ｍである。

＜下りの道＞

角石とは石英の方言　角石は焼鉱する際に捨てられた角ばった素石。石英は方言でシロイシと呼ぶ。

東延からのトンネル　第一通洞。第一通洞南口当たりも東延であった。第一通洞南口に東延合宿所があった。

第三の坑口　第三通洞口。

トンネルを抜けると　大マンプと小マンプを抜けると

煉瓦作りの建造物　旧配電所で、現在のマイン工房。電気関係の建物が煉瓦で造られている。

いちばん高いところに小学校や病院　明治３９年ごろの別子銅山略地図から記述している。いちばん高い所の一の森と二森の鞍部に小学校があり、病院は小学校よりもずっと下である。マイン工房のレベルである。

呉木の住宅跡の記述も略地図の読図である。

コンクリートの道・・・荒れ果てて　昭和６３年に銅山の里自然の家が開所する前の東平は、昭和４３年に東平坑が閉山してから無人となっていたので草が繁茂していた。

コンクリートの道は、マイン工房下の駐車場になっている当たりのことか。

河又まで車の通る道　東平撤退のために、自衛隊が演習の一環で工事を行い昭和３９年に完成した４２１５ｍの道。

引き返して足谷川の方に　登山道は呉木の風呂場上の車道から小学校、接待館、小マンプ、大マンプ、第三通洞前に至っていた。第三通洞前からの下り道は、第三変電所前、トラス橋、百雷峡、策動中継基地横、近道への分岐、大休み、鹿森ダムと続く。大休みの下からは、展望台に出る道、県道に出る道、遠登志橋に出る道と分かれる。

足谷の絶壁の間　百雷峡の箇所。

鹿森ダムの青い水面見え　策動中継基地の前に休憩所があり、少し下るとダム湖が見える。

策動基地の前には、木の坑水路が残っていたが、記録していない。

分かれ道　大きくたくっている登山道を避けて、北側にある坑水路のレンガを敷いて近道が作られている。遠道を下ると掘割り、石のベンチがある。それらは江戸時代の遺構と考えられている。古くは、立川銅山道と住友新道の分岐点でもあった。

3. おわりに

「雨の銅山越」の日付は４月２１日となっているが、年が不明である。最初の説明板の設置は、昭和４４年３月である。前段の「赤石山系の山」で昭和４６年６月出版の「赤石山系の自然」を引用している。しかし、登山記録の間に挿入した、赤石山系の概要説明だから、編集時の加筆とも考えられる。

新居浜観光協会発行の「別子銅山」の旧別子銅山調査団一行が現地訪れたのは、昭和４６年１１月で、銅山越えの標高は古い１２９１ｍで記載されている。１２９１ｍはかなり長く採用されていたので、年の特定にはならない。

私が初めて旧別子を案内されたのは、昭和４７年の７月であった。通常はダイヤモンド水までの案内であるが、円通寺出張所跡まで下って銅山越えへ引き返した。その時にはダイヤモンド水の場所に造林小屋が、あったかなかったか、記憶は曖昧である。だだ、一升瓶が転がっていて廃墟の谷に生活感が漂うという、違和感を覚えた記憶はある。

「雨の銅山越」の登山記録は、昭和４４年から４８年の間と推測される。出版までの７０日は、原稿整理、校正に要し、昭和４８年度までの活動記録を出版したと考える。ざっと半世紀前である。接待館の跡地に植わっているヒノキも煉瓦塀と背比べをしている時である。

愛媛新聞で天気を調べると、４月２１日（土）は、曇り夜から雨。４月２２日（日）は、雨のち曇り。４月２１日の記載は、昭和４８年であった。学生の登山だからね、土曜日・日曜日となるので、曜日も合致している。

「別子開坑二百五十年史話」が、昭和１６年に刊行され、長きにわたって別子銅山史とみなされて読まれてきた。地域にあっては、ようやく「旧別子銅山案内」が、別子銅山の歴史と地理の解説書として、昭和４４年に刊行された。ここに初めて、別子銅山関係施設の説明が身近になされたこととなる。そんな時代に、市外の人による旧別子のレポートは、現地に設置された説明板に依るしかなかった。愛大生は、登山の途中で思いもよらない説明版に出会い、興味本位にメモを取ったようである。登山が目的なので遺跡を踏査する意識は少なかったから、説明板もかなり飛ばしている。遺跡の記述も不正確になっている。

通りすがりの人では、正確に別子銅山の遺跡を紹介することは困難である。東海道新幹線・山陽新幹線のグリーン車に備える雑誌「ひととき」の１９ページにわたる別子銅山特集でも、校正に１２０余りの間違いを指摘しなければならなかった。